

「学ぶことの原点」

「学ぶ」と「真似る」の語源は共通していると言われています。この2つの言葉は、日本語の語源を調べると、いずれも古語の「まねぶ」に由来しています。この語には「模倣する」や「習う」という意味が含まれており、「学ぶ」と「真似る」はそこから分岐していったと考えられています。

「真似る」とは他の人の行動や仕草、考え方をそのまま模倣することを意味します。他の人のやり方を模倣しながら、それを習得し、自分のものにしていくこと、学び取るというプロセスが「学ぶ」ことにつながっていきます。

「学ぶ」は「真似る」ことから発展し、より深い知識や理解を得る意味へ広がりを持つ言葉へと成長したのに対し、「真似る」は模倣そのものに焦点を置いた言葉になったと言えます。

「真似る」という行動は、「学ぶ」というプロセスの初期段階といえます。実際、人間は多くの学びを模倣・真似から始めます。例えば子どもが言葉を覚える際、大人の言葉を「真似る」ことから始まりますよね。芸術やスポーツなどの技術は、手本を「真似ながら学ぶ」過程が不可欠です。

日本の企業も他業種から色々なことを真似ながら学んでいます。これを専門用語で「ベンチマーキング」といいます。アメリカの航空会社はF1のピットでレーシングカーを高速で整備するシステムを学びました。コンピューターのIBMも衣料品会社の在庫整理術を学んだそうです。

スポーツでも上手な選手のプレーを学ぶことは効果的です。昔から技術を「盗む」という少し物騒なワードが使われていましたが、誰もがそのような過程を経て一流になっていると思います。

プロ選手の技術を盗むことも良いと思いますが、身体が追い付いていないこともあるので身近な選手のほうが参考になったりします。

同じチームだと抵抗感もあったりしますが、試合をする敵チームからは「盗める」ものがたくさんあります。私も自分が現役のころ、専門的な指導者がいないチームでしたから、強いチームに負けた後に自分がやられたプレーを練習して会得したことを覚えています。

だからこそ練習試合は勝てる相手ではなく、負ける経験が貴重になります。まったく歯が立たない相手にやられて落ち込むのではなく、違いを一生懸命見つけてください。そのような相手とは何回も試合をする機会は持てないと思います。1秒でも見逃したら損だと思って戦うことが大切です。

日本もかつての経済大国のプライドを捨てて、他国に学ぶ時期なのかもしれません。謙虚な姿勢こそが復活への鍵になると思います。